

面子の共有に関する日中比較

——日中大学生の質問紙調査を基に

林 萍萍

はじめに——研究の背景と目的

二〇一四年一月の日本政府の中国人に対するビザ発給要件緩和が発表されて以来、来日中国人観光客が急増している。日本政府観光局（JNTO）が二〇一九年一月一六日に発表した訪日外客数統計によると、二〇一八年に日本を訪れた外国人は年間三一一九万人であり、そのうち中国人は八三八万人（約二七%）で、訪日外国人の国別で一位であった。¹⁾

また、二〇一八年五月三一日外務省が在外公館などを通じて実施した「海外進出日系企業実態調査」を発表し、二〇一七年一〇月一日時点で海外に進出している日系企業の



総数（拠点数）は、中国三万二三四九拠点（約四三%）で、国別の一位であった。²⁾さらに、二〇一八年一月八日、日本外務省は積極的に外国人技能実習生を受け入れる方針で、中国、ベトナムといった八カ国で改正出入国管理法を試験すると発表している。今後、日本で働く中国人が増える可能性があると予想できる。このように、日本国内と中国国内では、日本人と中国人が直接コミュニケーションする機会が増えている。

ところで、急増する来日中国人観光客のマナー問題やトラブルが度々日本メディアに報じられている。二〇一八年一月二四日夜、成田発上海浦東行きジェットスター航空35便が上海での降雪のために欠航となり、搭乗エリアにとどまった中国人客一七五人の一部が航空会社の手配に不満を

訴え、駆け付けた警官らともみ合いを起こした事件^③がいまだに印象に残っている。また、二〇一五年九月二六日、ハネムーンで北海道を訪れた中国人カップルがコンビニの店員に暴行し逮捕された。札幌市のコンビニで妻が会計前にアイスクリームを食べたことが騒動の発端となった。店員からの注意に「妻が侮辱された」と腹を立てた夫が店員に暴行した。

これらのニュースを見た日本人は、「中国人が野蛮で暴力的だ。マナーが悪い」と思う人が多かったかもしれないが、中国人の国民性を理解し、中国人はなぜそんなに怒りを感じたかを考えれば、理解できないこともないかもしれない。また、もし日本人が中国人の国民性がある程度理解できれば、トラブルを避けることができたのかもしれない。これらのトラブルの多くの原因は、日本人と中国人双方が互いの国の文化の違いを十分に理解していないことにあると考えられる。円滑な日中コミュニケーションを図るには、互いの価値観や、行動原理を理解することが重要かつ喫緊の課題と言えよう。

中国人の行動原理を理解する上で、中国人の面子を理解することは重要であり、不可欠であることは数多くの研究者により指摘されている。Smith [1894] は面子が中国人の性格の最大の特徴と評し、Lin Yutang [1936] は面子を中国人の人間関係において最も精緻な基準であるとしてい

る。さらに、Hofstedeら [2010] は、価値観に関する大規模な国際比較の調査を行い、世界五〇カ国の価値観調査の結果を分析し、中国人が面子を個人の富よりも遥かに重視していることを見出した。

Hu [1944] は、面子の概念の起源は紀元前四世紀の中国にさかのぼれると述べている。また、Hu [1944] によれば、中国人の面子には二つの側面があり、それぞれ「臉」(lian) と「面子」(mianzi) である。前者は人間の基本的な道徳的価値を、後者は個人が努力で築き上げていく名誉・声望であり、社会が人の成功と見栄に与える承認を指している。

一方、日本では、末田 [1998] が面子を「ある社会の枠組の中で他者に認識してほしい公的イメージ」と定義している。穴田 [1985] は「体面」が日本人の行動原理であり、それは面子と同じ意味であると述べている。井上 [2007] は「世間体」を日本人の基本的な対人行動様式と規定し、「世間体」は「面子」「体裁」「体面」「面目」と類似していると述べている。Tao [2014] は日本人大学生を対象に面子に関する質問紙調査を行ったところ、八五%以上の回答者が面子を日本人にとって非常に大切なものだと評価したことがわかった。

上述のように、「面子」は中国人と日本人の対人コミュニケーションにおいては非常に重要な行動原理であると言

える。一方、日本人と中国人の面子の捉え方はどのように異なっているのだろうか。本研究では、質問紙調査により、日本人と中国人の面子の意識を比較することで、面子意識の日中差から、日本人と中国人の対人関係の相違点を検討する。

一 先行研究

(一) 面子と対人関係に関する研究

面子は対人関係をどのように規定しているかについて、台湾人研究者の Hwang [1987] が提唱している「人情」―「面子」モデルが最も知られている。

Hwang によれば、相手との関係性により面子の性質は異なる。氏は中国人の人間関係を、「感情的関係」、「道具的関係」、それらの中間である「混合的關係」の三つに分類した。「感情的関係」は需要法則 (need rule)、「道具的関係」は公平法則 (equity rule)、「混合的關係」は「人情法則」に支配されているとする。もし家族のような「感情的関係」であれば、相手の要求に対して無条件・無制限に応じる。もし顧客と店員のような「道具的関係」であれば、相手の要求に対して「give and take」、すなわち公平法則に則って対応する。もし相手が友人、隣人、知人、同郷

人といった「熟人」(shuren)・日本語では友人・知人・隣人)であれば、相手の要求を拒否することは相手の面子を潰すことになるため、相手の面子を考慮して要求に応じる、すなわち「人情法則」で対応する。このように、Hwang は、面子に関わる問題は、家族同士のような「感情的関係」や赤の他人同士のような「道具的関係」で生じず、「熟人」・同士のようない「混合的關係」では生じると論じている。すなわち、中国人は「熟人」の前で最も面子を意識する。その理由について、黄 [2011] は、以下のよう考察している。長年にわたり絆と愛情を培ってきた家族であれば、互いの荣誉と恥辱の経験を共有し、互いの「里子」(lizi)・本質)を知っているため、社会的相互作用を行う際に「做面子」(面子獲得)をする必要がない。一方、中国人は友達との間で部分的な荣誉と恥辱を共有し、いつも相手に良いイメージを与えたいため、「做面子」をする必要がある。

翟 [2004] は面子の対人的特徴について、以下のよう述べている。中国社会では、個人は本人が属している家族に欠かせない一員であるため、その面子は単に個人のものだけでなく、家族全体のものでもある。もし個人の行動が家族の期待に応えた場合、当人は非常に光栄に思うことは無論、その家族もその荣誉と資源を共有することができ。もし個人が不面目なことをした場合、当人が強く恥じ

らい、面子喪失を感じるだけでなく、家族も面子を失う。

このように、面子は拡散的なものであり、面子の行為傾向は自分と関わる人との共有に特徴づけられている。

一方、日本での面子の扱い方と対人関係について、穴田 [1985] は面子が世間の範囲で働くとは指摘している。また、文化人類学者 Lebra [1976] は、より私的で親密度の高い関係 (intimate situation) のもとでは、他者と自己が本音で通じ合うような相互作用が行われる。このような場合には互いが「面子や社会的仮面」を外してありのままの自分をさらけ出すことができるかと論じている。大崎 [2008] は日本人の「ウチ」を二重構造として捉えている。大崎によれば、「ウチ」は家族・親友・親しい仲間を含む「内内集団」が内側にあり、会社やクラスを含む「内外集団」がそれを囲むという二重構造になっている。「内内集団」の関係は親密性が高く、「面子」を共有する。「内外集団」の関係は特に親密性が高くなく、必ずしも「面子」を共有しない。このように、日本と中国それぞれの社会文化において、親密度が高すぎず低すぎず、友人や同僚の前で、面子が最も問題となる一方、親密度が高い相手とは面子を共有すると言えよう。

(二) 面子に関する日中比較

日本人と中国人の面子を比較検討した研究はいくつか報

告されている。末田 [1995] によれば、中国人の面子の概念は経済力と能力に関わるのに対して、日本人の面子の概念は社会的立場に関わる。さらに、末田 [1998] は質問紙調査の結果をもとに、面子が能力評価に関わる場合、中国人は日本人より面子を強く意識するのに対し、面子が処遇に関わる場合、その逆の傾向がみられると報告している。

林 [2107] は、日本人大学生61人、中国人大学生65人を対象に質問紙調査を行い、面子の概念については、先行研究で取り上げられている面子に関する十一要素と面子との関係を五段階で評定させたところ、名声、名譽、学識、地位、社会的評価、権力が面子と関係があると思っている人の割合は、中国人より日本人の方が高いのに対して、人脈、才能、道徳が面子と関係があると思っている人の割合は、日本人より中国人の方が高いことがわかった。この結果に対して、学識を除き、日本人の面子に関係する要素は評判に関与しており、中国人の面子に関係する人脈、才能、道徳は、自分の所有物であり、他者の評価にあまり依存していないことから、日本人の面子概念は他者を意識するという集団主義的側面をより強くもっているのに対して、中国人の面子概念は自己を意識するという個人主義的側面をより強くもっていると論じている。

林 [2018] では、日本人大学生47人と中国人大学生68人を対象に質問紙調査を行い、面子喪失に焦点を当て、日本

人と中国人における面子喪失に関する感情と対処について比較検討したところ、次に述べる結果が得られた。「笑われた」場面、「叱られた」場面、「嘘がばれる」場面、「借金を催促された」場面、「ケチと言われる」場面、「しつげが悪いと言われる」場面において、中国人は日本人より強く面子が潰されたと感じる一方、「クビになることを言われる」場面、「欠点を指摘される」場面、「ふられたことを言われる」場面において、日本人は中国人より強く面子が潰されたと感じる。また、面子が潰されたと感じた時に、日本人は恥じらいと嫌悪を、中国人は怒りを最も強く感じる。全体の面子喪失の程度は中国人の方が強いが、怒りを除くすべてのネガティブ感情は日本人の方が強いこと、日本人は中国人より「感情を抑制する」と「気にしないようにする」という対処法を多く行うのに対して、中国人は日本人より「話題を変える」、「言葉や表情で感情を表出する」という対処法を多く行うことが示唆された。

これまで、面子のネガティブ側面である面子喪失は多く検討されてきたが、「面子が立つ」といった面子のポジティブ側面はほとんど検討されていない。また、面子意識について、日中比較がほとんど行われていない。

本研究では、面子のネガティブ側面だけでなく、面子のポジティブ側面にも焦点を当て、質問紙調査により、日本人と中国人の面子意識を検討する。具体的には、次の三つ

の課題を検討する。

- (1) 日本人と中国人はどのような場面で面子が立つと感じるか。
- (2) 日本人と中国人は誰の前で面子を保ちたいと思うのか。
- (3) 日本人と中国人は関連した他者の面子をどのように共有するのか。

二 調査

(一) 調査Ⅰ——面子が立つ場面に関する日中比較

朱 [1988] は、面子獲得（すなわち、自分の面子が立つように努力すること）について以下のように述べている。たとえ面子喪失の脅威を感じていなくても、自分あるいは自分が所属する集団のために、多くの面子を獲得することは普遍的な行為である。所有する社会的賞賛が多いほど、個人の社会的影響力が大きいため、面子獲得の欲求は上限がない。面子喪失と面子獲得は、単に社会的相互作用における対極の結果ではなく、それらを引き起こす社会的行為に対する評価の基準も異なる [Ho 1976]。これまでの面子研究では面子喪失といった面子のネガティブな側面に関するものが多く、面子のポジティブな側面に対する検討が

少なかった〔趙 2013〕。日本人と中国人はどのような場面で面子が立つと感じるのだろうか。

(1) 目的

質問紙調査により、面子が立つと感じるときに生じる感情及び面子が立つ感情を引き出す出来事について日中比較を行う。

(2) 方法

調査協力者…日本人は関西のある大学の大学生112人（男48人、女64人、平均19・3歳、標準偏差0・80）であった。

中国人は中国在住の大学生154人（男70人、女84人、平均21・6歳、標準偏差1・90）であった。

質問紙内容…「面子が立つ」と思われる出来事を三つまで書いてもらった。また、自分が経験した最も「面子が立つ」経験を回想しながらその時に生じる感情を書いてもらった。

手続き…日本人の調査では、授業で質問紙を配布し回答を求めた。授業終了後質問紙を回収した。調査に用いた質問紙は日本語版であった。中国人の質問紙調査では中国の「問巻星」というウェブサイトで実施した。調査時期は二〇一六年二月である。

(3) 結果・考察

面子が立つに関する場面について、日本人からのべ232、中国人からのべ447の回答が得られた。長い文を短い部分に

分解した後、KJ法により分析を行った。本稿では、面子が立つ感情を引き出す出来事についてのみ報告する。

KJ法については、筆者と心理学研究者一名の協議によりカテゴリー化の基準を決めた。その基準に基づいて、筆者がカテゴリー化し、その結果を心理学研究者とともに再検討することにより、より整合化した分析とカテゴリー化を行った。

信頼性を確かめるため、別の日本語母語話者一名に場面とカテゴリーを提示し、それぞれの回答はどのカテゴリーに当てはまるか（どのカテゴリーにも当てはまらない場合、独自にカテゴリーを作ってもらう）を評定してもらったところ、分類の一致率は90・2%であった。

中国人のデータは、同じ方法で、日本の大学にいる中国人大学院生1名に分類してもらった。分類の一致率は89・5%であった。また、評定が不一致であった回答については、話し合いにより最終的な分類を決定した。

面子が立つ場面として、日本人は「成績が良い」「運動能力が高い」「才能が多い」といった「能力・業績・成功」(35・3%)を最も多く挙げ、次いで人を助けるといった「利他行動」(13・2%)・「賞賛・承認される」(13・2%)、「他者より優れている」(10・9%)、「他者に奢る」(7・5%)、「所有品(高いものや珍しいものをもっている)」(5・3%)である(表1)。

表1 日本人の面子が立つ場面

カテゴリー	項目数	割合	項目内容（記述例）
能力・業績・成功	94	35.3%	成績が良い。運動能力が高い。才能が多い。
利他行動	35	13.2%	人を助ける。
賞賛・承認される	35	13.2%	褒められる。
他者より優れている	29	10.9%	他人よりできる。
他者に奢る	20	7.5%	後輩に奢る。
所有品	14	5.3%	高いものや珍しいものをもっている。
期待・信頼される	9	3.4%	信頼されている。
役割・規範	6	2.3%	肩書きなりのことができている。
結婚・恋人	5	1.9%	恋人がいる。
社交性	5	1.9%	友人が多い。
その他	14	5.3%	地位がある(3)、努力(2)、性格が良い(2)、恥をかかない(2)、道徳感をもっている(1)、家族と友人が成功している(3)。
合計	266	1	

「他者に奢る」項目は、全て「先輩が後輩に奢る」か「上司が部下に奢る」という目上の人が目下の人に奢る場面である。ここでの「他者に奢る」行為は一種の利他行動と考えるもよいと考えられる。

取り上げる度数は少ないが、「その他」のカテゴリーには、「地位がある」「努力」「性格が良い」「恥をかかない」「道徳感をもっている」「家族と友人が成功している」といった内容が含まれている。

中国人は「能力・業績・成功」(39・8%)が最も多く、次いで「賞賛・承認される」(16・2%)、「他者より優れている」(7・8%)、「所有品」(5・7%)、「結婚・恋人」(5・3%)、「家族や友人の成功」(5・3%)である(表2)。

取り上げる度数は少ないが、「その他」のカテゴリーには、「他者に奢る」「期待・信頼されている」「役割を果たしている」「道徳感をもっている」「プレゼントをもらう」といった内容が含まれている。

日中間共通な場面が多く得られた。相違点については、日本人は中国人より、「利他行動」を多く挙げている($\chi^2(1)=33.85, p<0.1$)。中国人は日本人より、「家族や友人の成功」を多く挙げている。また、「金持ち」「外観」は中国人に特有の回答である。

面子が立つ場面として、日本人も中国人も「能力・業績・成功」「賞賛・承認される」「他者より優れている」の

表2 中国人の面子が立つ場面

カテゴリー	項目数	割合	項目内容 (記述例)
能力・業績・成功	194	39.8%	成績が良い。優秀である。
賞賛・承認される	79	16.2%	褒められる。
他者より優れている	38	7.8%	他人より良くできる。他人の出来ないことができる。
所有品	28	5.7%	ブランド品をもっている。車、家をもっている。
結婚・恋人	26	5.3%	恋人がいる。
家族や友人の成功	26	5.3%	身の回りの友人が成功している。
お金持ち	21	4.3%	金持ちである。
外観	16	3.3%	きれいである。オシャレである。
利他行動	11	2.3%	人を助ける。
社交性	10	2.0%	友達が多い。
性格	9	1.8%	性格が良い。
地位	7	1.4%	地位が高い。
有名人と知り合う	6	1.2%	有名人と知り合う。
良い生活	6	1.2%	良い生活を送っている。
その他	11	2.3%	他者に奢る (3)、期待・信頼されている (3)、役割を果たしている (2)、道徳感をもっている (2)、プレゼントをもらう (1)
合計	488	1	

三つのカテゴリーを多く挙げています。

(二) 調査2——面子を保ちたい相手に関する日中比較

調査1では、日本人と中国人がどのような場面で面子が立つと感じるかを検討したところ、自分の能力を他者に認められ、他者に賞賛・承認されたときに、日本人と中国人は面子が立つと感じることがわかった。このように、自分を他者によく見せたい、他者からよく評価されたいという気持ちは誰にでもあると考えられる。それでは、日本人と中国人は誰の前で自分をよく見せて、自分の面子を保とうとするのだろうか。

(1) 目的

質問紙調査により、中国人と日本人は誰の前で、最も面子を保ちたいのかを検討する。

(2) 方法

調査協力者…日本人は関西のある大学の大学生61人(男36人、女25人、平均年齢19.2歳、標準偏差1.06)であった。中国人は浙江省のある大学の学生65人であった。

質問紙内容…「親」「兄弟」「他の親戚」「親友」「友達」「恋人」「クラスメート」「先生」「その他」の九項目の中から上位三つを選択し、面子を保ちたい相手について、1位から3位まで順位をつけてもらった。中国語版質問紙において、面子を保ちたい相手に関する質問は「你最想在谁面

表3 日本人の面子を保ちたい相手

順位 点数	第1位 3点	第2位 2点	第3位 1点	回答数	合計 (順位毎回答数×点数)	加重平均 (合計/回答数)
友達	23	20	4	47	113	2.40
クラスメート	8	12	9	29	57	1.97
恋人	12	3	12	27	54	2.00
親友	9	5	7	21	44	2.10
親	0	9	13	22	31	1.41
兄弟	2	3	7	12	19	1.58
先生	2	4	4	10	18	1.80
親戚	1	3	4	8	13	1.63
後輩	3	0	0	3	9	3.00
先輩	0	1	0	1	2	2.00

表4 中国人大学生の面子を保ちたい相手

順位 点数	第1位 3点	第2位 2点	第3位 1点	回答数	合計 (順位毎回答数×点数)	加重平均 (合計/回答数)
親	20	3	0	23	66	2.87
友達	11	12	10	33	65	1.97
クラスメート	8	9	13	30	55	1.83
恋人	7	5	10	22	41	1.86
親戚	5	9	6	20	39	1.95
先生	1	7	9	17	25	1.47
同僚	0	7	4	11	18	1.64
兄弟	3	2	3	8	16	2.00
上司	1	1	1	3	6	2.00
親友	0	1	0	1	2	2.00

前有面子”である。

手続き…日本人についての調査では、教員が心理学関係の授業で質問紙を配布し、回答を求めた。授業終了後質問紙を回収した。調査に用いた質問紙は日本語版であった。中国人についての調査では、中国の「問巻星」というウェブサイトで質問紙調査を行った。調査者がまずウェブサイトで中国語版の質問紙を作成した上で、そのウェブサイトのアドレスを知人に送信し、回答を求めた。調査期間は二〇一四年六月である。

(3) 結果・考察

複数の選択肢を選んだ回答者の回答を除き、日本人大学生60人、中国人大学生56人を分析して得られた結果をそれぞれ表3、表4に示す。

第1位をみると、日本人は、「親」を選んだ人が一人もおら

ず、友達を選んだ人が最も多かった。中国人大学生は、親を選んだ人が最も多かった。すべての相手について総合的に評価・比較するため、これらについて1位の項目には3点、2位には2点、3位には1点を与え、人数を乗じたものを順位得点とし、さらに平均値（順位得点を回答数で割ったもの）を求めて順位づけを行うことにした。

中国人大学生は、順位得点上位5位は、友達（113点）、クラスメート（57点）、恋人（54点）、親友（44点）、親（31点）であった。1位である友達の順位得点は2位のクラスメートより遥かに高く、約2倍であった。また、加重平均を見ると、友達が最も高く、次いで親友・恋人・クラスメート、親であった。中国人大学生は友達の前で最も面子を保ちたいことがわかった。

中国人大学生の順位得点上位5位は、親（66点）、友達（65点）、クラスメート（55点）、恋人（41点）、親戚（39点）であった。また、加重平均を見ると、親が最も高く、次いで友達・親戚、恋人・クラスメートであった。中国人大学生は親の前で最も面子を保ちたいことがわかった。

面子を保ちたい相手について中国人大学生と日本人大学生の間で有意な差があるかどうかをt検定により調べたところ、親 ($t(43)=10.59, p<0.05$) と友達 ($t(78)=2.19, p<0.05$) の間に有意な差がみられた。中国人は日本人より、親の平均値は有意に高く、友達の平均値は有意に低かった。すな

わち、中国人は日本人と比べ、親の前でより強く面子を保ちたいのに対して、中国人大学生は中国人大学生と比べ、友達の前でより強く面子を保ちたいことがわかった。

(三) 調査3——面子の共有に関する日中比較

蘇・黄 [2003] は、退職した高齢者（台湾人）と大学生（台湾人）を対象に、自分、子供（親）、親友の成功・失敗（成就と品格）について、一対比較法を用いて、面子が立つ（面子が失われる）程度を評定させた。その結果、面子が立つ程度については、高齢者は自分の子供の成功を最も強く感じ、その程度は子供＜自分＜親友という順であり、大学生は自分自身の成功を最も強く感じ、その程度は自分＜親＜親友という順であることがわかった。

面子が失われた程度については、高齢者は自分と子供の品格を最も強く感じ、その程度は、自分＜子供の品格＜自分・子供の成就＜親友の成就・品格という順であった。一方、大学生は自分の品格を最も強く感じ、その程度は自分の品格＜親の品格＜自分の成就＜親友の品格＜親の成就＜親友の成就という順であった。

これらの結果について、蘇・黄は、退職した高齢者は、自分の仕事成就を求めていないが、華人は親子間に強い一体感をもっており、子供の成就を自分の成就としてみなす傾向があると考察している。

表5 面子獲得・面子喪失に関する場面設定

面子得失	関与者	場面の内容
面子獲得	自分・親友	成績が良く、一流大学の学生である 有名な大手企業で働いており、工作上成功している 品格が良く、周りの人からの評判が良い
	親	学歴が高く、有名な大学の出身である 有名な大手企業で働いており、工作上成功している 品格が良く、周りの人からの評判が良い
面子喪失	自分・親友	成績が悪く、大学に合格できなかった 何回も面接に失敗し、就職できなかった 品格が悪く、周りの人からの評判が悪い
	親	学歴が低い 小さな会社で働いており、仕事に不成就である 品格が悪く、周りの人からの評判が悪い

本調査では、蘇・黄 [2003] を参考に質問紙を作成し、日本人と中国人はどのぐらい家族や親友の面子を共有するかを検討する。

(1) 目的

日中大学生を対象に、質問紙調査により、関与者が面子獲得・面子喪失に与える効果について日中比較を行う。

(2) 方法

調査協力者：日本人は関西のある大学の大学生53人（男32人、女21人、平均19・4歳、標準偏差1・23）、中国人は中国在住の大学生107人（男45人、女62人、平均21・6歳、標準偏差2・49）であった。

質問紙内容：場面提示法を用いて質問紙調査を行った。評定者に自分（親友・親）が成功・失敗（三場面・学業・仕事・品格）する時に生じる感情（喜び・誇り・面子が立つ、恥じらい・面子喪失）の程度を五段階で評定させた。また、親友と親が、評定者（私）、自分自身の成功・失敗をどのように感じるかを五段階で推測してもらった。提示される場面は表5の通りである。親友条件については、最も親しい友人一人を想起してもらうように教示した。評定者が自分である条件の教示文は「以下の場面について、あなたがどのぐらい喜び／誇らしさ／面子が立つ／恥じらい／面子が失われると感じますか」、評定者が親友と親という条件の教示文は、「以下の場面について、あ

なたの親友／親がどのぐらい喜び／誇らしさ／面子が立つ／恥じらい／面子が失われると感じるとあなたが推測しますか」となっている。

手続き・日本人についての調査では、教員が心理学関係の授業で質問紙を配布し、回答を求めた。授業終了後質問紙を回収した。調査に用いた質問紙は日本語版であった。

中国人についての調査では、中国の「問巻星」というウェブサイトで質問紙調査を行った。調査者がまずウェブサイトに中国語版の質問紙を作成した上で、そのウェブサイトのアドレスを中国人大学生に送信し、回答を求めた。調査期間は二〇一五年六月である。

(3) 結果・考察

①評定者が自分(私)である場合

自分が評定者である場合(例えば、「あなたは、成績が良くて、一流大学の学生である場合、あなた自身はどのぐらい喜びを感じるか」)、関与者ごとに、場面ごとに、日中大学生の喜び・誇り・面子が立つ・恥じらい・面子喪失の程度を比較するために、感情の程度を従属変数とし、文化(参加者間要因：日本人、中国人)×関与者(参加者内要因：自分、親友、親)×場面(参加者内要因：学力、仕事、品格)の混合三要因分散分析を行った。本稿では、面子得失の程度に与える関与者の影響の文化差のみを報告する。

喜び ($F(1, 158) = 16.06, p < 0.01$; $F(2, 316) = 23.74, p < 0.01$)、

誇り ($F(1, 158) = 10.41, p < 0.01$; $F(2, 316) = 15.79, p < 0.01$)、面子が立つ ($F(1, 158) = 7.86, p < 0.01$; $F(2, 316) = 12.27, p < 0.01$)、面子喪失 ($F(1, 158) = 9.03, p < 0.01$; $F(2, 316) = 14.30, p < 0.01$) については、文化の主効果と文化と関与者の主効果が有意であった。恥じらいについては、文化と関与者の交互作用のみが有意であった ($F(2, 316) = 15.78, p < 0.01$)。

文化の主効果については、自分が評定者である場合、全体的感情強度について、中国人大学生は日本人大学生と比べ、より強く喜び、誇り、面子が立つ、面子喪失を感じる(図一)。

文化と関与者の交互作用については、各関与者における文化の単純主効果を検定したところ、喜び ($F(1, 474) = 15.78, p < 0.01$; $F(1, 474) = 40.16, p < 0.01$)、誇り ($F(1, 474) = 15.83, p < 0.01$; $F(1, 474) = 20.54, p < 0.01$)、面子が立つ ($F(1, 474) = 8.38, p < 0.01$; $F(1, 474) = 19.68, p < 0.01$)、面子喪失 ($F(1, 474) = 63.6, p < 0.01$; $F(1, 474) = 6.20, p > 0.05$) のいずれも、関与者が親友と親である場合に単純主効果が有意であった。

すなわち、自分が成功したときに、日中大学生は同じ程度で喜び、誇り、面子が立つと感じる一方、自分が失敗したときに、日中大学生は同じ程度で恥じらいと面子喪失を感じる。親友と親が成功したときに、日本人大学生よりも中国人大学生の方が強く喜び、誇り、面子が立つと感じる一方、親友が失敗したときに、日本人大学生よりも中国人

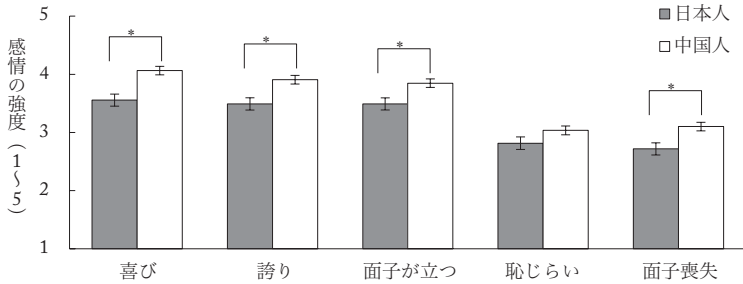


図1 各感情における文化の主効果

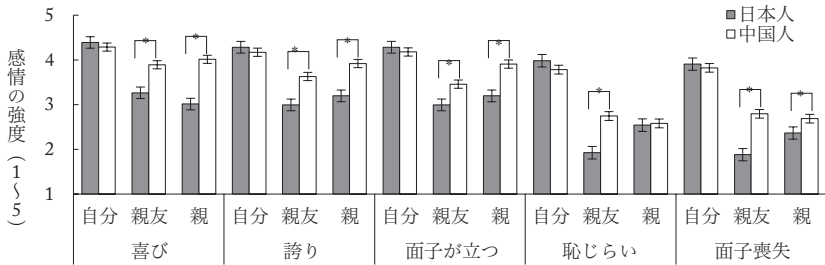


図2 日中大学生の各感情における文化と関与者の交互作用

大学生の方が恥じらいを感じ、親友と家族が失敗したときに、日本人大学生よりも中国人大学生の方が面子喪失を感じる(図2)。

② 評定者が親友である場合

推測された親友の評定について、関与者ごとに、場面ごとに、日中大学生の喜び・誇り・面子が立つ・恥じらい・面子喪失の程度を比較するために、感情の程度を従属変数とし、文化(参加者間要因:日本人、中国人)×関与者(参加者内要因:私、親友自身)×場面(参加者内要因:学力、仕事、品格)の混合三要因分散分析を行った。

その結果、喜び ($F(1, 158) = 8.07, p < .01; F(1, 158) = 25.13, p < .001$)、誇り ($F(1, 158) = 12.90, p < .001; F(1, 158) = 20.88, p < .001$)、面子が立つ ($F(1, 158) = 18.55, p < .01; F(1, 158) = 24.00, p < .001$) は、文化の主効果、文化と関与者の交互作用が有意であった。一方、恥じらい ($F(1, 158) = 8.07, p < .01$) と面子喪失 ($F(1, 158) = 12.01, p < .01$) は文化と関与者の交互作用のみが有意であった。下位検定を行ったところ、喜び ($F(1, 316) = 27.53, p < .001$)、誇り ($F(1, 316) = 31.85, p < .001$)、面子が立つ ($F(1, 316) = 40.63, p < .001$)、恥じらい ($F(1, 316) = 12.83, p < .001$)、面子喪失 ($F(1, 316) = 13.22, p < .001$) のいずれも、関与者が調査参加者(私)の場合のみに単純主効果が有意

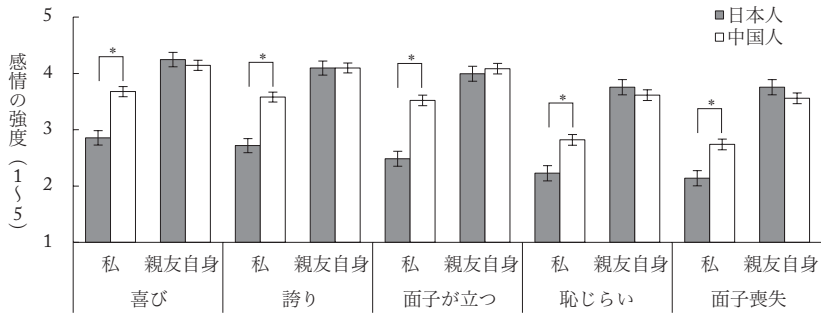


図3 推測された親友の各感情における関与者と文化の交互作用

であった。すなわち、親友自身自身が成功・失敗した場合に、親友が感じた各感情の強度には日中差がない一方、中国人大学生は日本人大学生比べ、親友が「私」の成功・失敗により強く喜び、誇り、面子が立つ、恥じらい、面子喪失を感じてくれると推測している(図3)。

③評定者が親である場合
 調査参加本人の推測した親の評定について、日本人大学生は、喜び ($F(1, 52)=11.65, p<.001$)、誇り ($F(1, 52)=5.80, p<.05$)、面子が

の主効果が有意であり、親が自分自身の成功よりも「私」の成功に強く喜び、誇り、面子が立つと感じると推測している。恥じらいと面子喪失について、関与者の主効果が有意ではなかった。日本人大学生は親が自分自身の失敗も「私」の失敗も同じ程度で恥じらいと面子喪失を感じると推測している(図4)。

一方、中国人大学生は、喜び ($F(1, 106)=47.33, p<.001$)、誇り ($F(1, 106)=45.85, p<.001$)、面子が立つ ($F(1, 106)=39.94, p<.001$)、恥じらい ($F(1, 106)=35.08, p<.001$)、面子喪失 ($F(1, 106)=45.02, p<.001$)、関与者の主効果が有意であり、親が自分自身の成功よりも「私」の成功に強く喜び、誇り、面子が立つと感じる一方、自分自身の失敗よりも「私」の失敗に強く恥じらい、面子喪失を感じる

と推測している(図5)。

親が評定者である場合に、関与者ごとに、場面ごとに、日中大学生の喜び・誇り・面子が立つ・恥じらい・面子喪失の程度を比較するために、感情の程度を従属変数とし、文化(日本人、中国人)×関与者(調査参加本人への評価、親友の自己評価)×場面(学力、仕事、品格)の混合三要因分散分析を行ったところ、文化と関与者の交互作用は有意ではなかった。

④調査参加者本人の出来事に対する本人・親友・親の評定以上、調査参加者本人(私)による自己評定(自分、親

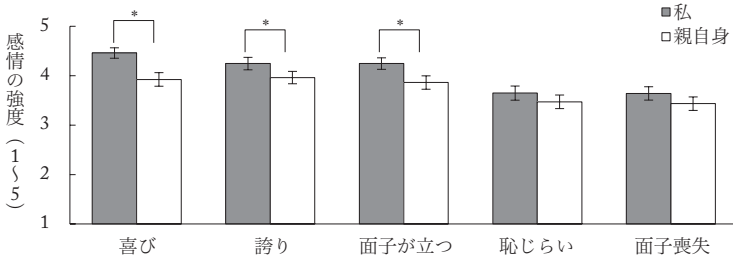


図4 日本人大学生の推測した親の感情

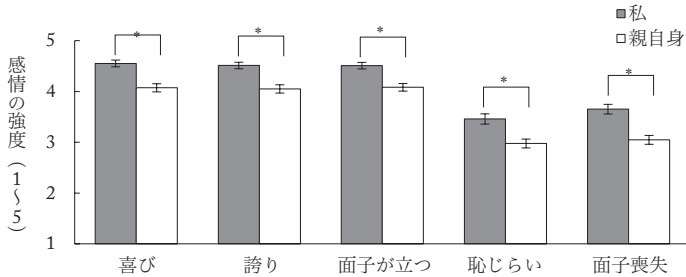


図5 中国人大学生の推測した親の感情

友、親)、親友による自己評定(調査参加者本人、親友自身)、親による自己評定(調査参加者本人、親自身)について、関与者の効果について結果を記述した。調査参加者本人の成功・失敗に対して、本人が感じた各感情の強度と、推測している親友と親の感情強度の間に違いがあるのだろうか。これを確かめるため、調査参加者本人のデータを抽出して、本人、親友、親の評定の平均を求めた。感情の程度を従属変数として、評価者(本人、親友、親)と場面を独立変数とした二要因分散分析を行った。ここでは、評価者の主効果と評価者と場面の交互作用を検討する。

日本人の結果を以下にまとめる。喜び ($F(2, 104) = 76.48, p < 0.01$)、誇り ($F(2, 104) = 67.22, p < 0.01$)、面子が立つ ($F(2, 104) = 87.98, p < 0.01$) については、日本人は評定者の主効果のみ有意であった。多重比較を行ったところ、喜び、誇り、面子が立つについては、日本人は、自分と親友、親友と親の間に有意差がみられ、喜び・誇り・面子が立つ程度は自分・親 > 親友という関係である。恥じらい ($F(2, 104) = 70.99, p < 0.01$; $F(4, 208) = 6.72, p < 0.01$) と面子喪失 ($F(2, 104) = 83.66, p < 0.01$; $F(4, 208) = 13.56, p < 0.01$) については、評定者の主効果、評定者と場面の交互作用が有意であった。評定者の主効果について、恥じらいと面子喪失の両方とも自

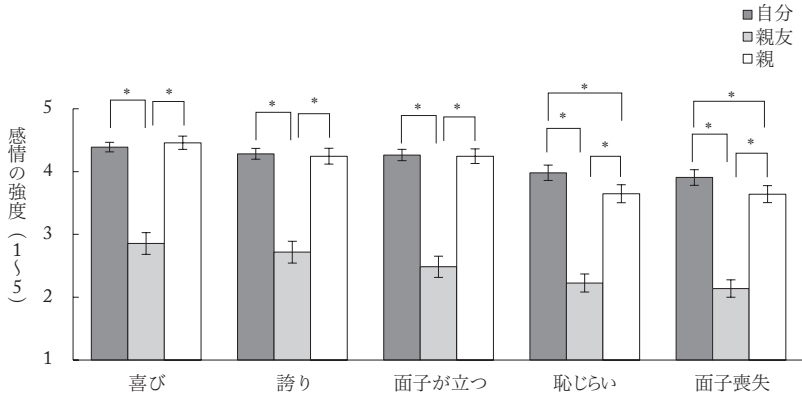


図6 日本人の自分の出来事に関する感情に与える評定者の主効果

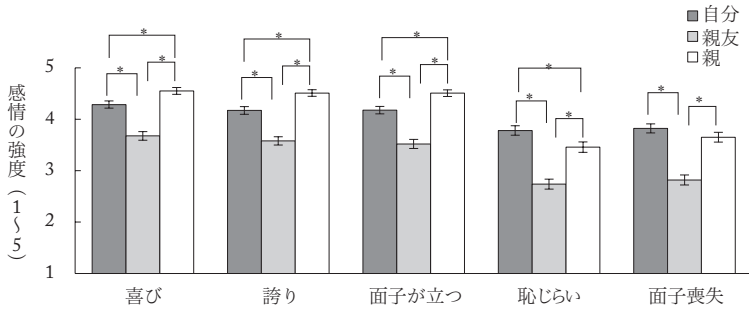


図7 中国人の自分の出来事に関する感情に与える評定者の主効果

分と親友、自分と親、親友と親の間に有意差がみられ、感情の程度は自分 \searrow 親 \searrow 親友という関係である(図6)。

中国人の結果は以下にまとめる。喜び($F(2, 212)=54.49, p<0.01$)、誇り($F(2, 212)=62.49, p<0.01$)、面子が立つ($F(2, 212)=71.27, p<0.01$)、恥じらい($F(2, 212)=43.50, p<0.01$)、面子喪失($F(2, 212)=51.67, p<0.01$)のいずれも、評定者の主効果のみが有意であった。

それぞれについて多重比較を行ったところ、喜び、誇り、面子が立つ、恥じらいについて、中国人は自分と親友、自分と親、親友と親の間に有意差がみられた。喜び・誇り・面子が立つ程度は親 \searrow 自分 \searrow 親友という関係である。恥じらいの程度は自分 \searrow 親 \searrow 親友という関係である。面子喪失について、中国人は自分と親友、親と親友の間に有意な差がみられ、面子喪失の程度は自分・親 \searrow 親友という関係である(図7)。

調査参加者本人の成功・失敗に対して、本人と親友と親の評定の間の違いに

ついでには、日本人は、喜び、誇り、面子が立つ感情については、親が自分と同じ程度で感じ、恥じらいと面子喪失については、親が強い程度で感じるが、「私」ほど感じていないと推測していることが示唆された。一方、中国人は、喜び、誇り、面子が立つ感情については、親が自分よりも強く感じ、面子喪失については、親が自分と同じ程度で感じ、恥じらいについては、親が強い程度で感じるが、「私」ほど感じていないと推測していることが示唆された。

三 総合考察

(一) 面子が立つ場面

面子が立つ場面として、日本人も中国人も「能力・業績・成功」「賞賛・承認される」「他者より優れている」の三つのカテゴリーを多く挙げている。「面子が立つ」の喚起状況は、「誇り」の喚起状況と共通していると考えられる。本稿では詳しく議論していないが、日本人と中国人の両方とも、面子が立つと感じた時に、最も感じる感情は喜びと誇りであることが報告されている【林 2017】。

有光【2007】は、誇りの喚起状況として、「合格、優勝、抜群」「他者から賞賛を受けたとき」「優位な立場に立ったとき」を報告しており、本研究で得られた面子が立

つ場面である「能力・業績・成功」「賞賛・承認される」「他者より優れている」と対応している。それは、「面子が立つ」と感じるとき、「誇り」という感情が生起するからであると考えられる。日中とも、面子獲得が自分の能力と他者の評価に大きく関わることが示唆された。

また、日本人は中国人より、「利他行動」を多く挙げているのに対して、中国人は日本人より、「家族や友人の成功」を多く挙げており、また、日本人の回答にはない「金持ち」「外観」を挙げている。

他人を助けること自体は他者と関わることであり、助けられる人から良い評価を得ることができるだけでなく、周りの人から良い社会的評判を得ることに繋がっている。一方、「家族や友人の成功」「金持ち」「外観」は個人の自分の所有物（付属品）であり、他者の評価にあまり依存していないと考える。この結果は、「日本人の面子の概念は中国人のものとは比べ、他者を意識するという集団主義的側面をより強く持つのに対して、中国人の面子概念は日本人のものとは比べ、自己を意識するという個人主義的側面をより強く持つ」という林【2017】の指摘を支持していると考えられる。

(二) 友達の前で最も面子を保ちたい日本人と
親の前で最も面子を保ちたい中国人

面子を保ちたい相手について、以下のような日中差が示唆された。日本人は友達の前で最も面子を保ちたいのに対して、中国人は親の前で最も面子を保ちたい。また、日本人は中国人と比べ友達の前でより面子を保ちたいのに対して、中国人は日本人と比べ親の前でより面子を保ちたい。

日本人の結果は、親密度の高い関係において、「面子や社会的仮面」を外してありのままの自分をさらけ出すことができるという Lebra [1976] の指摘を支持している。また、日本人の結果は、日本人大学生を対象者に行った質問紙調査において、友人が重要他者、すなわち普段の生活でその人物からどのように思われているか気になる他者として、最も多く挙げられたという小島 [2005] の結果と一致する。

黄 [2011] によれば、家族同士は互いの荣誉と耻辱の経験を共有し、互いの「里子」(Lia: 日本語で「本質」)を知っているため、家族の前で面子を意識する必要がない。中国人は家族の前で常に面子を保ちたい、良いイメージを与えたいという研究で得られた中国人の結果は黄 [2011] を支持しない。その理由については、以下のように考えられる。

浅川・楊・祁・福本 [2011] は、現代の中国人大学生は一人っ子政策が実施された後で生まれ、育った年代であり、社会の変化に伴いまた両親が過保護化するのに従い、周囲の人間と交流が少なくなってきたという特徴を有すると指摘している。党・高 [2011] は、一人っ子は往々に家族からの過剰な期待を背負っていると指摘している。また、高・木藤 [2008] は、中国の子どもたちは親の期待に応じて、幼い頃から強い競争心をもつようになり、常に自分を他人と比べながら成長していると指摘している。さらに、尚 [2000] によると、中国人は幼少時から勉学に励み、立派な人間になることで、両親の面目を施すように、家族のために名誉を獲得するように、と教育されている。そのため、一人っ子は家族の期待が自分一人に集中していることを意識し、親の期待に応えなくてはならないというプレッシャーを抱えるのであろう。したがって、両親からの自分に対する評価が非常に重要となる。現代の中国人大学生は親に対しても常に良いイメージを与えたいと思い、親からの賞賛を獲得しようとしていると推測できる。本来、互いの本質を熟知し面子を意識する必要がない家族の前であっても、現代の中国人大学生は親をがっかりさせたくない、親の期待に応えたい気持ちが高く、自分の面子を意識しているのであろう。

(三) 日中とも親しい他者の出来事に 強く面子関連の感情を感じる

本研究では日本人と中国人の両方とも親密な他者の面子を共有することが示唆された。すなわち、日本人と中国人は親友と親の成功・失敗に対して共感的感情を強く感じる。面子が拡散的なものであることが確認できた。この結果は、翟 [2004] と黄 [2011] が主張する、情緒的關係に属する家族同士は互いに榮譽と恥辱を共有しているという説を支持する。ところで、他者の出来事に強い面子関連の感情を感じるの、他者と面子を共有すると結論付けてよいのだろうか。

ここで、親友と家族の成功・失敗に共感することについて、感情の共感という視点から論じる。人々は自分の行為が評価されるときだけでなく、他者の行為が評価されるときも、恥じらいなどの感情を感じるがあると報告されている。他人の行為による恥じらいは、vicarious shame（我がことのように感じる恥じらい）と呼ばれる [Welten et al. 2012]。Welten et al. [2012] は、他者の行為と自己概念の間の結びつきはプロセスが必要であると主張し、これまでの研究は二つの異なるプロセスを扱っていると述べている。

一つ目のプロセスは社会的アイデンティティの脅威

(social identity threat) である。すなわち、自分が所属している集団のアイデンティティが個人の自己イメージに影響しているということである (Mackie et al. 2004)。個人が自己と所属集団を同一化する場合、所属集団内の仲間の行為により共感的感情を経験する。二つ目のプロセスは認知的共感 (cognitive empathy) である。すなわち、人々は他者視点取得 (take another person's perspective) によって共感的感情を感じる。相手の立場に立って状況を把握し、自分が同じ状況に置かれるならどう感じるのかを想像すること
で強い感情を経験する [Batson 2011]。

Welten et al. [2012] が質問紙調査により他者の行為による恥じらいが社会的アイデンティティの脅威と認知的共感とどのような関係にあるかを検討したところ、親しい行為違反者条件では社会的アイデンティティの脅威は共感的恥じらいを予測できるが、認知的共感共感的恥じらいを予測できない。一方、親しくない行為違反者条件では、認知的共感共感的恥じらいを予測できるが、社会的アイデンティティの脅威は共感的恥じらいを予測できないことがわかった。

本研究では、親友や家族のような親密な他者の成功と失敗に対して、日中とも強い面子関連の感情を感じていることがわかったが、これは、親友と家族の成功や失敗は自己と強く関わっており、個人の自己イメージにポジティブな

たはネガティブな影響を与えうるという社会的アイデンティティの共有のプロセスをもとに説明できると考えられる。

(四) 中国人は日本人より親友と親の出来事に より強く面子関連の感情を感じる

中国人は日本人と比べ、より強く親しい他者の面子を共有している傾向があり、親密他者の成功・失敗が中国人の面子に、より強い影響を及ぼしていることが示唆された。

これは、「面子が立つ場面として、中国人は日本人よりも多く「家族や友人の成功」を挙げているという調査」から得られた知見により裏付けられると考えられる。

中国人は日本人より親友と親の出来事により強く各感情を感じることを、親密度、一体感、自己開示欲求を用いて以下のように説明する。

黄 [2009] は、面子の共有が生じるのは個人が他者と一体感をもっているからであり、一体感が強いほど面子をより共有すると論じている。また他の研究では、他者との親密度が高いほど、共感的喜び [山本 2009]、共感的羞恥 [桑村 2009] が強く経験されることが報告されている。

親との親密度、家族との一体感について、日本人より中国人が高いことが報告されている [賀・永久 2013]。高・木藤 [2008] は日本と中国の大学生を対象として、質問紙

調査により日中の親子関係を比較したところ、中国人大学生が日本人大学生よりも親に対して高い依存性を示す結果が得られた。また、中国の親子関係について、「親と子が口に出さなくてもお互いの気持ちがわかるという精神的な親子の連帯意識が強く、結婚後も近くに住み、老後も同居を望むなど、生涯にわたって親との関係を密に保とうとする意識が強いと指摘している。家族との一体感・連帯感を用いて、日中大学生の親の面子共有の違いを説明できると考える。

それでは、友人関係については、中国人も日本人と同様、友人と高い一体感を感じているだろうか。王 [2009] は、日本人と比べ、中国人の交友観は親密感を重視し、友人への気配りが欠如していると述べている。上原ら [2011] は、日中台の大学生を対象に友情観を比較したところ、中国人の友人関係が三群の中で社会的距離が最も小さく、日本人の友人関係は社会的距離が最も大きく、社会的距離の近さは中 \vee 台 \vee 日という関係であることを報告し、中国人は友人に対して、あまり礼儀を重視せず、信頼感をもって相手の面子に配慮しながら率直な意見表明をする傾向があるのに対し、日本人は相手を気遣い、迷惑をかけるないようにする傾向があると述べている。

山崎・張 [2009] は、日中大学生を対象に調査を行ったところ、両文化において「親しい友人」の意味する内容は

ほぼ等しい構造をもつ一方、中国人は日本人と比べ、友人、家族を気安く互いに紹介するなど壁の低い傾向がみられると報告し、中国では「友達の友達は友達」として、友人が友人を紹介して友人の輪が広がっていくが、日本ではソーシャル・ネットワークの集団と集団が切れていると論じている。

このように、中国人は親しい友人に対してより親密になり、心理的距離をなくそうとしているが、日本人は相手を気配りして、親密になっても相手と一定の心理的距離を置くため、中国人は日本人と比べ、親友の出来事により共感しているのではないだろうか。

また、中国人は日本人と比べ、家族と親友の出来事をより共感したい欲求があるからではないかと考える。山崎・張「2009」が指摘しているように、中国人は対人コミュニケーションにおいて友達同士を紹介し合うことに抵抗がない。中国人は日常の会話において常に自分の親友や家族の話題、特に親友の自慢話をする傾向があるが、日本ではこのような傾向はあまりみられず、日本人は個人のプライバシーをあまり話さない聞かない傾向がある。中国人は自分の重要他者の成功を他者に知らせることによって自分の株をあげようとするため、家族や親友の出来事に対して日本人より強く反応するのではないかと考える。これは今のところ試論に過ぎず、確かめる必要がある。

さらに、日本・中国・韓国・台湾の四つの地域の成人を対象に行った価値観に関する調査（EASS・東アジア社会調査、2008）は、「友人のどのような資質を重視するのか」という項目において、中国人は日本人と比べ、より友人の「頭がよい」「教養がある」「権力のある」「裕福である」といった社会的影響力を重視していることを報告している。

世界の六〇以上の国で共通の項目で調査をするという大規模な研究プロジェクトで、五年ごとに調査が行われている世界価値観調査（World Values Survey Wave 5: 2005-2009）は、「友人からの期待に応えられるように努力する」という項目について、そう思う（「強く思う」+「そう思う」の割合）と回答している中国人は七四・八%であるのに対して、日本人は五四・四%であると報告している。このように、友人を選択する際に、中国人は日本人と比べて友人の社会的経済的影響力をより重視しており、友人と付き合う際に、中国人は日本人と比べ、より強く友人の期待に応えようとしているのは、中国人は友人との間で面子及び面子関連の感情を強く共有したいと動機付けられているからであると考えられる。

（五）推測された親友・親の感情についての日中差

推測された親友の感情については、日中とも、親友が調査参加者である「私」よりも、親友の成功・失敗に強く面

子関連の感情を感じる事が示唆された。また、親友についての評定の日中差について、親友自身の場合に有意な日中差がみられず、関与者が「私」である場合、全ての感情は日本人より中国人の方が強い、すなわち、中国人は日本人と比べ、親友がより自分の成功を喜び、誇り、面子が立つと感じ、自分の失敗を恥じらいと面子喪失と感じると推測している。これは、中国人大学生が親友の成功・失敗に強く面子関連感情を感じており、親友も同じように感じてほしい、親友もそう感じると期待しているのではないだろうか。

また、推測された親の感情については、日中とも親が自分自身の成功よりも「私」の成功の方が喜び、誇り、面子が立つことをより強く感じると推測している。一方、日本人は親が自分自身の失敗と「私」の失敗について同じ程度の恥じらいと面子喪失を感じるのと推測しているのに対し、中国人は親が自分自身の失敗より「私」の失敗の方により恥じらいと面子喪失を感じると推測していることが示唆された。面子に関連するポジティブ感情については日中に同じ傾向がみられた。日本人と中国人の親が、日頃自分自身の出来事より子供である「私」の出来事の方により強くポジティブ感情を感じている姿勢をしており、なんらかの形でそのようなメッセージを伝えたため、日中大学生は親がこのような感情規則をもってると推測しているのではな

いだろうか。日中大学生とも自分が親にとって重要な存在であると認識しており、親は絶対「私」の成功の方を親自身の成功より喜ぶはずと信じているかもしれない。

さらに、調査参加者本人の成功・失敗に対して、本人と親友と親の評定の間の違いについては、日本人は、喜び、誇り、面子が立つ感情については、親が自分と同じ程度で感じ、恥じらいと面子喪失については、親が強い程度で感じるが、「私」ほど感じていないと推測していることが示唆された。一方、中国人は、喜び、誇り、面子が立つ感情については、親が自分よりも強く感じ、面子喪失については、親が自分と同じ程度で感じ、恥じらいについては、親が強い程度で感じるが、「私」ほど感じていないと推測していることが示唆された。中国人は、自分が成功したときに、親が自分よりも喜び、誇り、面子が立つと感じるように推測しているのは、上述したように、日頃中国人大学生が親からの高い期待を認知しているからであると考えられる。

ポジティブ感情については、両親が自分と同じ、または自分以上に強く感じると推測されているが、ネガティブ感情については、両親が自分より弱く、また自分と同じぐらい強く感じると推測されている。感情の種類によって、共有される程度が異なることが示唆された。

結 語

本稿では、質問紙調査により、日中大学生がどのような状況で面子が立つと感じるか、誰の前で面子を保ちたいのか、親友と親の出来事にどのぐらい面子を共有するのかを検討した。その結果、日本人は友達の前で最も面子を保ちたいのに対して、中国人は親の前で最も面子を保ちたいこと、中国人は日本人より親友と親の面子を共有することが示唆された。考察では、本研究の知見を先行研究の結果と比較して、上述の結果を生み出す社会文化的要因、特に日中の文化差について議論した。

家族の前でよい自分を見せたい、面子を保ちたいという中国人の心理は、「家族の期待に応えたい」「家族のために頑張る」ように、中国人の行動の原動力になると考えている。

本研究で面子の共有をめぐる検討を通して、日中文化における対人関係のあり方に関して新たな知見を与えることができたと考える。翟 [2004] が指摘しているように、面子の動力と行為傾向は自分と関わる人との共有に特徴づけられる。したがって、他者との面子の共有は中国人の行為パターン、感情、行為の動機づけにより強く影響していると考ええる。

また、家族と親友の成功と失敗を強く共有することは、日常生活における中国人の親密関係の形成と維持に反映されていると思われる。中国人同士が出会って話しているうちに気が合うと、一方が相手に対して「これから我々は友人（親友・身内）ですから、あなたのことは私のことですよ（『你的事就是我的事』）」のように、相手を「身内」として扱うことを相手に宣言し、互いの絆を固めていき、一気に家族のように親しく付き合う関係になる傾向がある。一方、日本社会においては、日本人が「なじみの関係」を築くには、多くの場合はかなりの期間を必要とする。このように、日本人と中国人が付き合う際には、温度差を感じることもあるかもしれない。

本研究の限界としては、サンプルサイズが小さいこと、サンプルに偏りがあることがあげられる。中国人の場合では、中国は地理的に広くて、経済力や社会的進展の地域差が大きいため、中国人の面子意識は地域によって異なることが考えられる。今後、地域差等の要素を考慮し、より幅広い層を対象とした調査を行う必要があると考えられる。

注

〈1〉 <https://statistics.jinto.go.jp/graph/#graph--breakdown--by--country> (参照2019-9-6)

- <2> https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4_006071.html (参照2019-9-6)
- <3> <https://www.sankei.com/affairs/news/180130/affr1801300052-n1.html> (参照2019-9-6)
- <4> https://www.excite.co.jp/news/article/Recordchina_20150929013/ (参照2019-9-6)
- <5> 本文において、中国語を引用する場合は、“囲みにする”。
- <6> KJ法とは、収集した情報をカード化し、類似のものでグルーピングすることで記述文の整理と分析を行う手法である。
- <7> <http://jgss.daiichodai.ac.jp/research/codebook/EASSS2008/CultureModuleCodebook.pdf>
- <8> <http://www.worldvaluessurvey.org/WVSOnline.jsp>
- 参考文献
- 穴田義孝 1985 「人間関係にみる日本人の国民性」『政経論叢』第五三巻四号、一〇六五—一〇四頁
- 浅川潔司・楊一農・祁秋夢・福本理恵 2011 「大学生における自己愛と大学適応の関連に関する日中比較研究」『兵庫教育大学研究紀要』第三八巻、四三—四九頁
- Batson, C. D. 2011 *Altruism in Humans*. Oxford University Press, USA.
- 党志强・高慧 2011 「浅談独生子女的家庭教育」『齐齐哈尔師範高等専科学校学报』二〇一一年第四期、二五—二七頁
- 井上忠司 2007 『「世間体」の構造——社会心理史への試み』講談社
- 高天碩・木藤恒夫 2008 「中大大学生の独立意識と親子関係」『久留米大学心理学研究』第七号、一九—二八頁
- 賀薔・永久ひろ子 2013 「大学生における親孝行とその影響要因の日中比較」『文京学院大学人間学部研究紀要』第一四巻、一四七—一六〇頁
- Ho, D. Y. F. 1976 “On the Concept of Face,” *American Journal of Sociology*, pp. 867-884.
- Hofstede, G., G. J. Hofstede, and M. Minkov 2010 *Cultural and Organizations: Software of the Mind*. McGraw-Hill.
- 岩井八郎・岩井紀子訳 2013 『多文化世界——違いを学び共存への道を探る』原書第3版、有斐閣
- Hu, H. C. 1944 “The Chinese Concepts of “Face,”” *American Anthropologist*, 46 (1), 45-64.
- Hwang, K. K. 1987 “Face and Favor: The Chinese Power Game,” *American Journal of Sociology*, 94:4-974.
- 黄光国 2009 『儒家関係主義——哲学反思』理論建構与实践証研究』心理出版社
- 黄光国 2011 『儒家社会中的道德与面子』黄光国・胡先缙編『人情与面子——中国人的权利游戏』中国人民大学出版社
- 小島弥生 2005 「他者からの評価に対する情緒的反応——賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および調整焦点による検討」

- 『立正大学心理学研究所紀要』第三号、七七一-九三頁
- 桑村幸恵 2009 「共感的羞恥と心理的距離」『バーソナリティ研究』第一七卷第三号、三二一-三三三頁
- Lebra, T. S. 1976 *Japanese Patterns of Behaviour*. University of Hawaii Press.
- Lin, Y. 1936 *My Country and My People*. The John Day Company.
- 林萍萍 2017 「面子の概念についての日中比較——日中大学生的の調査をもとに」『次世代人文社会研究』第一三号、二〇一-二二六頁
- 林萍萍 2018 「面子喪失に関する日中比較——日中大学生的の質問紙調査を基に」『国際文化学』第三二号、一五二-一六七頁
- 林萍萍 2017 「面子が立つ場面の日中比較」『感情心理学研究』第二四卷 Supplement号、ps 三三五頁
- Mackie, D. M., L. A. Silver, and E. R. Smith 2004 "Intergroup Emotions: Emotion as an Intergroup Phenomenon." In L. Z. Tiedens and C. W. Leach (eds), *Studies in Emotion and Social Interaction. The Social Life of Emotions*, pp. 227-245.
- 大崎正瑠 2008 「日本・韓国・中国における「ウチ」と「ント」」『東京経済大学人文自然科学論集』第一二五号、一〇五-一二七頁
- 尚会鵬 2000 『中国人と日本人——社会集団、行為方式和文化心理的比較研究』台湾・南天書局
- 末田清子 1995 「面子」の概念の違いとそれによるコミュニケーション・スタイルの違い——中国人と日本人」『Human Communication Studies』二三、一-三頁
- 末田清子 1998 「中国人学生と日本人学生の「面子」の概念及びコミュニケーション・ストラテジーに関する比較の一事例研究」『社会心理学研究』第一三卷第二号、一〇三-一一一頁
- 蘇珊筠・黄光國 2003 「退休老人與大学生在生活場域中的關係與面子」『中華心理學刊』第九二卷第四五号、二九五-三二二頁
- Smith, A. H. 1894 *The Chinese Characteristics*. New York: Flinging H. Revell.
- Tao, L. 2014 "Evaluating the Concept of 'Face' (Mentsu) in Japanese Verbal Communication," *Intercultural Communication Studies*, 33 (1), 112-124.
- 上原麻子・鄭加禎・坪井健 2011 「日中台における大学生の友情観比較——「間主観性」概念の検討をもとに」『異文化間教育』第三四号、一二〇-一二五頁
- 王怡 2009 「日中大學生における交友關係の比較研究(1)——質問項目の因子分析による検討」『北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集』第一二号、一一一-一二三頁
- Welten, S. C., M. Zeelenberg, and S. M. Breugelmans 2012 "Vicarious Shame," *Cognition & Emotion*, 26 (5), 836-846.
- 山本良子 2009 「共感的喜びと妬みの発生に關与する状況要因」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第四九号、二

三七—二四五頁

山崎瑞紀・張日昇 2009 「友人關係を維持する方法における日中文化比較」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』第一〇号、九二—九九頁

有光興記 2007 「誇りの經驗的定義」『日本心理学会第七一回大会発表論文集』九二—六頁

翟学偉 2004 「人情、面子与權力的再生産」『社会学研究』五、四八—五七頁

趙卓嘉 2013 「由“面子”衍生的若干近似概念的辨析」『社会心理学』一、八四—九三頁

朱瑞玲 1988 「中国人的社会互動——論面子的問題」翟学偉編著 2006 『中国社会心理学評論』第二輯、七九—一〇六頁